

タウンリーⅡ サイクル劇(Ⅳ)

橋 本 侃

第三演目 ノア (のあと息子タチ) (後編)

(31)

妻 あんた、なんなの、どうかしたの？

あんたを困らせてるの、誰なの？

脅かされているなら、

逃げ出したほうがいいわよ。

(32)

ノア 糸巻きに他の紡ぎ糸が巻かさ⁽¹⁾っているようなもので、

他の仕事で手がふさがっているんだよ、奥様。

妻 その一つひとつをわたしに言ってみてごらんよ――

さもないと、とがめられるよ、あんたは。

〈写本左十頁〉

ノア 悲しみを和らげられる方の、
 み名があがめられますように！

わしらの幸せのために、

危害が加えられないように守ってくださると約束され、

こうおっしゃった――

この世のすべてに

すさまじい洪水を

いちどきに押し寄せさせ、

覆いかぶせることにした、と。

(33)

わしらだけを除いて

すべての者を殺す、と言われた、

神に従うわしらの子どもたちと

その三人の妻たちを除く、とも。

わしらの命と動産を救うために、

力すべてを尽くして

一艘の船を造るように命じられた――

あの気高い、痛みの癒し手である神に
感謝しよう。

さあ、急いで、造った船に乗り込むのだ。

妻 何がやら分らない――

困ったね、あんたがそんな話をするから、
体が震えて止まらない。

(34)

ノア 怖がるな。早く済ませてしまえ――

わしらの荷物をまとめ、

昼前には着けるようにしろ――

もうこれ以上のごたごたはごめんだ。

息子一 直ぐにそのようにしましょう。

弟よ、運ぶのを手伝ってくれ。

息子二 そんなにぐずつくことなく

勤めを果たしましょう。

兄弟一緒にやりましょう。

息子三 自慢じゃないが、

ぼくの力も役に立てましょう。

妻 それでも、殴られると怖いから、

みんな、お母さんをうまく助けてくれるんだよ！

(35)

ノア 「箱舟まで来て」さあて、しかるべきように、

こうして船のところまで来た。

道具を持ち込め、

家畜と動産も、

この船の中へ、

さあ、わしの立派な子どもたち！

妻 「一人だけ居残って」閉じ込められるようなことは今までに一度もなかった。

そんなわたしに、栄えあれ、だ――

こんな牡蠣みたいな宿屋なんか閉じ込められるなんて！

本当に、区別がつかないね、

この船のどっちが前で、どっちが後ろなのか。

でも、わたしたちはこんなとこに閉じ込められるんだね、

ノアさん、あんたが栄光に浴しているおかげで。

(36)

ノア 理屈に合ったことだから、奥方様よ、

ここで神の恩寵を待たなければならぬ。

それゆえ、妻よ、気持ちよく、

さあ、こっちの場所に入りなさい。

妻 ジャックだろうがジルだろうが、誰が来ても、

この顔をそいつに向けるつもりはないね。

この丘の上で、

時間があるかぎり、

糸巻き棒に糸を紡いでいよう。

奴がわたしを捕まえられたら結構なことだ！

さあて、腰を下ろすか……。〔腰を下ろして紡ぎ始める。〕

でも、誰も邪魔立てしないように、と忠告しておくわよ。

さもないと、一発食らわせてやるからね。

(37)

ノア〔船の中から〕見ろ、大空の様子を！

その大小に関わらず、

天の水門のすべてが

見事到大開きになって、

七つの惑星⁽²⁾は

定位置から離れてしまった。

稲妻と稲光は

打ち落とされた、

おどろおどろしくも、

住居にも部屋の両方にも、

城と塔にも。

この豪雨は激しく

辺り一面に降り注ぐ。

それゆえ、妻よ、もう糸紡ぎは止めにして、

急いで船の中に入れ。

妻

そのとおりだね、ノアさんよ、でも、行って自分の靴⁽³⁾を直したらどうだ！
それだけ長持ちするはずだから。

女房一

良いお母さん、船の中へ直ぐにお入りください――
空一面に雲が立ちこめ、太陽も月も、

雲に覆われていますから。

女房二 それに突風も吹きまくり

とても激しいものです――

それで洪水が起こるのです。

それゆえ、お母さん、中へお入りください。

妻 そうであっても、糸を紡ぐつもりだよ。

お前たちがいくら叫ぼうが、むだなこった。

(38)

女房三 その気があるなら、お母さん、

船の中で糸を紡げばいいでしょうに。

ノア さあ、これが二度目の命令だ、中に入れ、

奥方様、わしの友愛に免じて。

妻 わたしが勝とうが負けようが、

あんたの愛情なんか

待ち針ほどにも価値を置いていないからね。

この手紡ぎの心棒を全部巻き取るんだ、

この丘の上で、

足を片方でも動かす前には。

ノア おお、ペテロにかけて言う、わしらは無駄口を叩いているだけだ。

それ以上、がたがた言わず、

気に入ったのなら、中へ入れ。

(39)

妻 本当だ、水が直ぐそばまで近づいて来ていて、

濡れないで座ってられない。

急いで船に乗り込もう。

そうだ、急ごう、

こんなところで溺れては困るから。

ノア 奥方様よ、確かだぞ、

高い買い物になるはずだった――

船の外に

長いこと居過ぎると。

妻 あんたの命令だが、行くつもりはないね、

戸口から糞の堆積までくらしいの近い距離でもさ。

ノア 長いことぐずぐずしているのは、

少しばかり鞭を食らうのがお好きのようだ。

(40)

妻〔船に入りながら〕あんたにお願いだ、物惜しみなどしないで、

思うとおりにやってくれ。

どんなにおおげさな言葉を聞いたって、わたしはひるまないからね。

ノア 待て、奥方様よ、酒を飲め――

そうしたら、この棍棒で

尻をひるまで殴ってやるから。〔妻を殴る。〕

これでどうだ？ 言うことがあるなら言ってみろ。

妻 何をほざく、この度胸なしのゴロツキめ！

ノア 何か言ってみろ！

わしに慈悲を乞え、と言ってるんだ！

妻 それについては何も言わん。

ノア それでもまだ、口は利いていやがる――今日の、この日にかけて言う、

お前の頭をかち割ってやる！

(41)

妻〔観客の女性に訴える〕主よ、安心していいのですね、

そして、心から健康でいられますね、
 もしも、いつの日にか、

野菜汁の一口でも財産としてある後家になれるのなら。

あんたの魂には、まやかしなしに、

一ペニーのびた錢でミサ献金を捧げてやるさ。

他の人たちはそうするだろうから氣にかけなさんな、
 ほら、この丘の高みから目にしている

ここに集まっている女の人たちは、

今、送っている生活のせいで、

亭主たちが死ねばいいと願っている。

なぜなら、日々の糧にかけて言う、

わたしの旦那もそうあってくれと願っているのさ！

(42)

ノア「観客の男性に訴える」女房のいる男たちは、

若いうちに

生活を楽しむつもりなら、

口は上品に使うようになさい。

わしが思うに、この胸はつぶれる思いだ、
肝臓と肺臓の両方⁽⁴⁾が、

そんな争いごとをしているのを

結婚している男たちの間に見る時には。

でも、このわしは、

神から祝福を得ているので、

この舌は上品にしている。

妻 それでも、あんたは失敗するかもしれないよ、

素寒貧のニコラスさんよ。

(43)

ノア お前を石のように無口にしてやる、

何かと最初に面倒を起すやつめ⁽⁵⁾！

お前の背中と言わず、骨と言わず、

どこもかしこも叩いてばらばらにしてやる。

妻 ああ、なんたること、わたしは死ぬ！

こいつめ、男の化け物！

ノア 妻のヤツがうめき声を上げているのをごらんあれ、

そして、わしのほうが下に組み敷かれているのも！

だが、妻よ、

こんなことは急いで止めにしよう――

背中が二つに折れそうだ。

妻 それに、こっちは殴られて青あざだらけで、

栄えることなどできぬは！

(44)

息子一 ああ！ どうしてこんなことに、

父と母のお二人よ！

息子二 そんなに恨みを持ってはいけません、

夫婦のそんな危機的状態に至るまでに。

息子三 この空模様は恐ろしい、

冷気にさらされると病毒をたくさんはらむことになるんだ。

ノア わしらはお前たちが言うとおりにすることにしよう。

愛しい子どもたちよ、

もうこれで恨み、つらみはおしまいだ。

それでは、わしは舵を取り、

船の航行に気を配ろう。〔舵を取る。〕

妻 ほら、天球に、見えるわよ、

あれが七つの星だと思っけど。

(45)

ノア 今は大洪水の最中だから、

妻よ、気をつけるのだ。

妻 こうして、つつ立っていると、大洪水だと実感できるわ。

わたしたちは恐ろしい目に遭っているんだね。

このように押し寄せてくる大波は狂ったようだ。

ノア 神よ、この危機からわたしたちを救ってください！

あなたは良い舵取りで、

しかも、すべての舵取りのなかで最高の舵取り⁽⁶⁾、

とわたくしめは承知しています。

わたしめに約束していただいたとおりに、

このような大波に翻弄されているわたしたちをうまく操ってください。

妻 これは危険が伴う事態になりそうだわ。

神よ、助けてください、このように助けを呼び求める時には！

(46)

ノア 妻よ、方向舵は頼むよ、
そうしたら、わしのほうは

海の深さを調べてみよう――

できるのなら、喫水線からの深さを。

妻 慎重にやってみましょう。

さあ、あなたの持ち場に行くといいわ――

この溢れた水の上を

何日も何日も長いこと

苦しみながら浮かんでいるのですから。

ノア さあ、どこまで下げたら水のところまで行くかを見てみよう。〔錘を垂らす。〕

ああ、海の底までは遠い。

いくら苦労して述べ伝えようと思っても、
これでは、どうやら、むだのようだ。

(47)

水はさっきまで

すべての丘の上まで

十五キュービツ(7)の高さまであった。

しかし、ここより高いところでは、
それどころではないかもしれない。

この事は良く承知しているが――

ここ四十日も雨は降り続いたのだから、
次第に雨は収まるだろう、

本当のところ。

今度はこっちの水の深さを

急いでまた計ってみよう。〔また錘を垂らす。〕

驚きだ――

ずいぶん浅くなっている！

(48)

今は風雨も治まり、

大きいのも小さいのも、

すべての天の水門が閉じられた。

妻 わたしにはそう見えますが――

東に陽が出て、輝いているようです。

見て、向こうにあるの、太陽でないかしら？

お祝いの席(8)を設けなくては――

あんなにひどい洪水が

もうすっかり引いてしまったんですから！

ノア わしらがみんな、ここまで来たのだ、

三百五十日(9)かけて。

妻 そのとおりです、海の広がりも狭まりました。

ああ、主よ、わたしたちは運に恵まれていたんですね！

(49)

ノア 三回目を試してみよう、「錘を下ろす準備をする。」

海の深さがどのくらいあるか。

妻 いつまでぐずぐずするおつもりなの？

早く測鉛をそちらへ下ろしたらどうなのです！

ノア 操舵用(10)の權で

海の底に触れられるくらいだ。

妻 それでは、間もなく始めてもいいわね、

わたしたちの喜びの宴を。

でも、夫よ、

この土地はどこかしら？

ノア アルメニアの山々だ。⁽¹⁾

妻 さあ、祝福されますように、

わたしたちのことを思って、このようにするようにお命じになられた方が！

(50)

ノア 高い山々の頂が、

一度にたくさんも見える。

わしの視界をさえぎるものはなにもない、

空模様がとてもまぶしい。

妻 これは神に慈しみがある証拠です、

本当に。

ノア 奥方様、どの鳥が一番なのか、

あなたの意見を聞かせておくれ――

何かを運んでくるのに適しているのは何の鳥だ。

翼でもって、

遅れることなく、

神の慈しみの印を何か、

北からでも南からでも持って来られるのは？

それと言うのも、今日が

十月の最初の日だからだ。

妻 賭けてもいい、大鳥なら

直ぐに戻ってくるでしょう。

できるだけ早く、

放してみなさいな——早くすませてよ！〔ノアは大鳥を放つ。〕

おそらく今日のうちに

戻ってくるか、

ぐずぐずして戻ってこないかのどっちかわ。

ノア 同じように放してみよう、

鳩⁽¹²⁾も一、二羽。

さあ、飛んでゆけ。

神がお前に獲物を送ってくれるように！

(51)

さあて、鳥たちは飛んで行ったぞ、

それぞれ違う国へ。

互いに祈りを捧げよう、

膝を突いて、

お一人だけでいらっしゃる方に向かって、

位階の上から言って、もっとも価値のある方、

直ぐに送ってくださいように、

放した鳥たちが獲物の分け前か何かを――

わしらを喜ばせてください。

妻 鳥たちは陸地に必ず届いていますよ、

こんなに水が引いたんですから。

ノア 全能の神に感謝を捧げよう、

わしらをお造りになった主に向かって！

(52)

不思議なことだ、

確かにそうだと思えるのだが――

こんなにも長いこと、ぐずついていて帰って来ない、

午前中に

放した鳥たちが。

妻　　そうかもしれませんわ、あなた、
持ち帰るのが遅れているのですよ。

ノア　鳥はいつも

腹を空かせている。

奴には節制が利かない。

死肉⁽¹³⁾の一つでも見つけると、

もしかすると、馬鹿だから、

そこから離れるつもりがないのだろう。

(53)

鳩のほうがもっと行儀がいい。

そこまで信頼している、

雉鳩に対してするように――

鳩はいつも信頼できるのだ。

妻　　ほら、ここからほんの少し離れたあんなところに、

鳩が来てよ、見て、見て！

口ばしで運んできたのね、

なにか新しい良い知らせを。

見てごらんさいよ！

オリーブの木から採ってきた

枝のようね。

ノア 確かにそのとおりだ。

確かに、そのように呼んでいいものをくわえている。

(54)

大いに祝福された鳥である鳩よ、

お前にいいことが起こりますように！

お前は信頼に足るほど忠実だ、

まるで石垣の石のようだ。

わしには良く分かっていたよ、

お前が住処に戻ってくるのが。

妻 本当の印というのは

わたしたちが皆、救われるはずになっていることです。

それゆえ、

鳩が戻ってきたのは、

〈左十二頁〉

真下の水までの深さが

一ファゾム⁽¹⁴⁾までに縮まって、

もっともっと浅くなっている。

(55)

息子一 洪水は終わったんですね。

ごらんください、お父さん！

息子二 誰一人として生き残っていません――

それは確かです！

息子三 石のように静かに、

ぼくたちの船は止まっています。

ノア この陸地の直ぐの所に

ぜひとも降りてゆきたいものだ。

愛しいわしの子どもたち、

セムとヤペテとハムよ、

喜び、楽しんで、

皆一緒に船から降りよう。

この場所にはもう留まるつもりはない。
〔皆は船から退出。〕

(56)

妻 この船の中に私たち、ずうっといたんですね――

長すぎですよ、ノアさん。

惨めで、苦しくて、

多くの悪をどんなに恐れたものですか！

ノア この緑の芝生をごらん！

荷車も鋤も

残されていないようだ。

木々も枝も、

他のものも

すべてのものがなくなっている。

多くの城だって、と言っとくが、

すばらしい大きな町も、

この洪水で根こそぎにされてしまったんだ。

(57)

妻 この洪水がこの広い世界のすべてに

恐怖を引き起こさなかったことだけは確かだが、

力づくで皆を一掃したのです、
海と海岸へ。

ノア 奴らはみんな死に至った、
もっとも誇り高い傲慢な者たち、
誰も彼も、

罪があると

明らかにあったのだ。

奴らは皆、殺され、

苦痛にふされた。

妻 そこから再び、

逃れることができるのでしょうか？

(58)

ノア 「逃れる」だとう？ いいや逃れられない、それは確かだ。

これからは、力ある方が、

人間の犯す間違いに心を掛けてくれ、

慈しみに向かい入れてくれるだろう。

苦難にある者は祝福されるはずなので、

この良き時にこそ、あの方に向かって祈ります、

あの方の高き天の国において、

わたしたちに一つの場所を用意してくれますように、と。

そうなるために、わたしたちは

聖者たちと一緒に、

光り輝く神の天使と共に、

神の光の中に迎え入れられますように。

神の慈しみを求めます、アーメン。

〔ココデ、「のあ」が終わり、「あぶらはむ」へ続く。〕

〔註釈〕

- (1) ノアは救われるために他の手立てを考えているのだが、糸を紡いでいる女房には嫌味に聞こえよう。
- (2) 中世では、七つの惑星とは、月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星を指す。
- (3) 「余計なお世話だ」という、ことわざ的な表現。 *Whiting*, S259 を参照。
- (4) 前行の「胸」を言い換えた表現。当時の生理学では、感情は肝臓に宿ると考えられていた。
- (5) 人間に原罪をもたらず樂園でのエバの言動を想起させる。
- (6) 神とノアが舵取りにおいて類似しているのはウエイクフィールドの劇作家がノアをキリストの予型と考えていることを表す。 (Notes, M. Stevens and A.C. Cawley, p. 452.)

- (7) 六・六〇七・八メートルに当たるとある。
- (8) 中世サイクル劇の上演日でもある六月中旬の聖体祭 (Corpus Christi) を示唆している。
- (9) 「創世記 (八、三)」では、洪水の継続期間は一五〇日とある。
- (10) *OED* の 'loof (palm of the hand)' は間違っている。(Notes, M. Stevens and A. C. Cawley, p. 453.)
- (11) トルコの東端、イラン国境近くにある死火山アララテ山のこと。「創世記 (八、六―十二)」では、箱舟がこの山頂に留まったのは七月十七日のことである。
- (12) 「創世記 (八、六―十二)」によれば、ノアはまずカラスを放った。その後、七日毎に三羽の鳩を飛ばす。
- (13) OE詩では、カラスは戦場を飛び交い、死肉を餌とするというイメージが定着していた。 *Beowulf*, ll. 2448 & 3024.
- (14) 「一ファゾム」は両手を左右に広げた時の指先から指先までの長さで、約一・八三メートル (≒六フィート) の長さの水深を指す。